

藤村発行「処女地」に執筆した〈無名〉の女性達

——伊東英子・林真珠——

永 渕 朋 枝

序

鳥崎藤村が発行した婦人雑誌「処女地」(大11・4、大12・1。全一〇冊)に執筆したのは、どのような女性達だったのか。彼女達が執筆したものを掘り起こすことによって、大正時代に物を書こうとした〈無名〉の女性達がどのような人生を辿ったのかを見てみたい。〈無名〉の人達は、歴史に名を残した人よりも遙かに多く、現在の我々からは見えない。それらの〈無名〉の人達の足跡を辿ることは、「処女地」の多様性と意義を再検討するだけでなく、無数の〈無名〉の人達の存在とその意味を知ることにつながるであろう。

「処女地」に書いた女性達の大半は「処女地」一誌で消えてしまったように考えられてきた。しかし、「処女地」終刊号に付けられた「附録 本誌執筆者別総目録」に掲載された四三名の執筆者のうち、一名は大きな文学事典等に項目のある女性達であった。さらに、それ以外の女性達も他の雑誌に作品を掲載している

ことを、拙論「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達」(『神女大國文』平19・3)、「藤村『処女地』の執筆者——補遺、素川絹子」(『神女大國文』平23・3)において明らかにした。本稿では、別名が判明した伊東英子と林真珠について執筆目録を大幅に補訂したい。そこから、〈無名〉ということについて考えてみたい。まず、略歴と、別名や略歴判明に至った経路について記す。それから執筆目録を掲げる。目録中、執筆者に関する記述の前には*を付けて批評や動静を記し、著書には●を付した。月刊誌の発行日は、一日発行でない増刊号のみ記した。作品名は本文中の題を記し、特集名などを〈 〉で囲んだ。作品名下の()内のジャンル名は目次による。

一、伊東英子^{ひで}

明治二三(一八九〇)年一月一日、昭和四九(一九七四)年七月三〇日(後述③による)。仙台市光禪寺通り生まれ。旧姓伊澤。

父の長兄は、日本近代音楽教育のもとをつくった伊澤修二、父の

弟に警視総監や台湾総督などを歴任した多喜男（劇作家飯沢匡いひざね けんの

父）がいる。父伊澤富次郎は東京大学医学部で学び、宮城医学校

助教諭、台湾総督府台南病院薬局長を経て、東京市下谷区竹町（現

台東区台東）で眼科医院を開業した。英子は満四歳まで仙台で育

ち、その後各地に移住したが、東京の下町生活が長い。六歳下の

妹は、宇野浩二「苦の世界」等のモデル伊澤きみ子。英子は、明

治四五年頃から伊澤みゆきの名で「少女画報」に少女小説を書き、

人気があった。「青鞥」「演芸画報」にも濱野ゆきの名で小説や劇

評を発表した。大正七年頃、伊東六郎と結婚。六郎は、チェーホ

フの翻訳書等を出した後、「中外」（大6・10～大8・4、続刊大

10・6、8）の編集委員となった。大正八年一月には六郎と英子

の名が「中外」編輯部一二名の中にある。その後、六郎は松竹キ

ネマ外国部等、外国映画の仕事に携わった。大正一三年、英子は

映画のカットを描いていた須田鐘太（のち大映取締役）と再婚。

その後も「赤い鳥」「処女地」「若草」等に執筆したが、昭和四年

以降の執筆が判明したものは、現在のところ、数編である。

ここで、英子の別名・略歴判明に至った、三つの経路について記しておきたい。

① 英子が「処女地」以外にも、「赤い鳥」や「少女倶楽部」等に童話等を発表していることについては、前出拙稿によって指摘した。さらに、「中外」（大8・1・1）掲載「編輯部」に名前が

あることがわかった。

また、小寺菊子「現代の若き女流作家」（『中央文学』大9・

6）における次の記載から、英子が「伊澤みゆき」という別名で

「少女画報」に書いていたことが判明した。

伊東英子さんが昨年三田文学に一つ発表されたさうですが

……此作者は元伊澤みゆきさんと云つて少女画報に少女小説

を書いてゐられたので、当時ちよい／＼読んでゐました。前

の吉屋さんのやうにデリケートな極めて優しい筆を持つてゐ

られますが、文章がずつと洗練されて、若々しく調子づいて

ゆくなど、いふ境地から、すつかり進んでゐられます。大変

に名作家であつたと思つてゐます。

② 「少女画報」に書いた伊澤みゆきについて、福田委千代「少

女小説の系譜——『少女画報』と伊澤みゆき」（『学苑』平23・

9）が発表された。

一定期間をそれなりに活躍しながらも、どういう来歴の持ち

主かほとんど知られないまま消えていってしまう人物は少な

くない。「少女画報」における伊澤みゆきも、その一人である。

とした上で福田氏は、「少女画報」の看板作家、徳田秋声門下の

関秀・尾島（のち小寺）菊子を時に差し置くかのような読者の支

持を受け、文章やスタイルが吉屋信子の「花物語」に通じる、伊

澤みゆきの五五篇（明45・7からは毎月大5・12まで掲載）の

分析をした。福田氏はさらに、川西政明『新・日本文壇史 第二巻』（岩波

書店 平22・4)に伊澤みゆきが、宇野浩二「苦の世界」「人心」「軍港行進曲」などのモデル伊澤きみ子の姉とされていることを指摘した。きみ子は、父が医者、叔父は警視総監の家庭に育ちながら、十六七の頃から家出を繰り返して私娼に身を落とし、宇野との貧窮した同棲生活から再び芸者に出、その後に自殺した、ヒステリ―の女性である。きみ子の経歴については、宇野浩二研究でかなり明らかにされている。

きみ子は、姉の影響で少女雑誌を読む習慣があったので、宇野が「揺籃の唄の思ひ出」(「少女の友」大4・5)の作者と知って惹かれたといわれている。宇野が新進作家としての地位を確立した「苦の世界」(大8・9)と大10・1。「解放」等に、「彼女の姉は、毎月からうじて一種の雑誌に、彼女のお伽噺とその名前とが見いだされるほどの、まだほんの無名の女流文士」(「宇野浩二全集 第一巻」中央公論社 昭47・4)とある。英子は、この姉のモデル、ということになる。

③ 青空文庫に収録するための没年調査に関わって、ネット上に「伊東英子をさがせ その1〜3」(岡本正貴 平24・8・10、13、18投稿。http://www.aozora.gr.jp/aozorablog/?p=8367_8357_8358_8359_8360_8361_8362_8363_8364_8365_8366_8367_8368_8369_8370_8371_8372_8373_8374_8375_8376_8377_8378_8379_8380_8381_8382_8383_8384_8385_8386_8387_8388_8389_8390_8391_8392_8393_8394_8395_8396_8397_8398_8399_8400)が展開された。岡本氏は「Googleブックスなどを使って、岩野泡鳴の日記に伊東英子が訪問したとあることを見出した。また『文芸年鑑』大正15年版(二松堂 大14・3)「文士録」の次の記載を見出した。

伊東英子 別名濱野ゆき。旧姓伊澤。松竹キネマ社員六郎氏

夫人。明治二十三年一月十五日仙台市に生る。数篇の小説の作あり。旧「処女地」同人。現在、東京市赤坂区田町七丁目3番地

そして、「濱野ゆき」「伊澤英子」という別名から、英子が「女子文壇」「青鞥」「演芸画報」にも執筆したことが明らかにした。また、田村俊子の私小説的小説「炮烙の刑」(「中央公論」大3・4)に描かれた人妻と若い男と夫の三角関係における若い宏三のモデルが、夫となった伊東六郎であることも明らかにした。さらに、大正一三年に西宮に居た「キネマ旬報」の出資者・六郎と英子の家に山本嘉次郎と須田鐘太がレコードを聴きに押しかけていたが、その鐘太と英子が恋仲になり、六郎に許されて二人は東京で結婚し、生涯を共にした^④こと、鐘太が後に大映取締役・大映東京撮影所長をつとめたことも明らかにした。さらに、岡本氏の投稿へのコメント(平25・2・21)によって、英子の没年が昭和48年7月20日とされた。

以下、福田氏の論文で言及されている作品名の右に「*」、岡本氏の指摘によるものに「**」を付す。

心の花 12-8 明41・8 伊澤英子「祖父様」^{**}

女子文壇 5-7 明42・5・15増刊「秀逸」の部に、ひつじぐさ^{**}「笑」^{**}／「日課表」^⑤の中に「伊澤英子」^{**}雅号ひつじぐさ^{**}

十九歳／岐阜市／叔母、従妹、自分、女中／朝叔母の

看病のひま／「文章世界」「窓」を読む／午後漸く脱稿

せし「小説」と「美文」を新作家に投ず（本増刊号の名「新家」を指すと考えられる：論者注） 東京の母へ叔母の病症を報ず 夜は従妹の学科を復習しやる 雨しとくと訪づれて都こひしく母こひしく涙落つ

東亜之光 4・10 明42・10 伊澤英子「昔の友」*（「想華」欄）

ムラサキ 6・11 明42・11 伊澤英子「小説 洋傘」*（「鑄木清

方画）

心の花 13・12 明42・12 伊澤英子「冬」*（小説）

心の花 15・44 明44・4 伊澤英子「昨日まで」

*東京日日新聞 明44・4・14朝 春鈴生「四月の文芸」

少女画報 1・7 明45・7 みゆき女「お土蔵の二階」

少女画報 1・9 大元・9 みゆき女「少女小説 撞初の日」

少女画報 1・10 大元・10 みゆき女「小説 たそがれ」

少女画報 1・11 大元・11 みゆき女「少女対話 丹波ほづ

き」（以下、「対話」は戯曲風の作品）

少女画報 1・12 大元・12 みゆき女「少女小品 手紙」

少女画報 2・1 大2・1 みゆき女「少女小品 春の灯の街」

少女画報 2・2 大2・1・5増刊 みゆき女「少女小説と

けぬ謎」

少女画報 2・3 大2・2 みゆき「少女対話 弱き笑み」

少女画報 2・5 大2・4 みゆき「旅の記憶」*（おもひで

少女画報 2・6 大2・5 みゆき「少女対話 その夜のこと」

少女画報 2・7 大2・5・10増刊 みゆき「対話 少女なれ

ば」

少女画報 2・8 大2・6 みゆき女「少女小説 子守唄」

少女画報 2・9 大2・7 みゆき女「少女対話 まぼろし」

少女画報 2・10 大2・8 みゆき「根岸より」*

少女画報 2・11 大2・9 みゆき「町子の日記」

女学世界 13・13 大2・10 濱野みどり「稚子の記憶」（光禪

寺通りで生まれ、五歳の冬に京都御所の近くに移って幼稚園に

通ったとある）

少女画報 2・13 大2・10・10増刊 みゆき「少女小説 無花

果の家」

少女画報 2・14 大2・11 みゆき「木屋匂ふ頃」

*青鞥 3・11 大2・11 「新入補助団員 濱野雪」*²

演芸画報 7・12 大2・12 みどり子「『丁字みだれ』の印象

下谷 みどり子」（「赤き実（クラブ欄より抜萃の投書）」欄）

少女画報 2・15 大2・12 みゆき「忘れえぬ佛」

少女画報 3・1 大3・1 みゆき女「除夜の鐘」

演芸画報 8・1 大3・1 みどり子「舞踊研究会の一夜

（——歌舞伎座の——）」

少女画報 3・2 大3・2 みゆき「少女対話 白梅月夜」

少女画報 3・3 大3・3 みゆき「闇に居て」

少女画報 3・4 大3・4 みゆき「春の夜」

青鞥 4・4小説号 大3・4 濱野雪「蝙蝠」*³

*帝国文学 大3・5・1 石坂養平「四月の文壇」 青鞥の十

編の作品についての評。「蝙蝠」は「明かに鏡花張りである。部分的にいゝ所があつた」。「此等の作の多くは若い男女の恋愛を描いたものでありながら、青鞥主義とも云ふべき女の自覚が余り出てゐない」

*青鞥 4・5 大3・5 「青鞥社補助団員名簿」「乙種会員」に「濱野雪」

少女画報 3・5 大3・5 みゆき「少女小説 捨犬」*

少女画報 3・5 大3・5 「紅の花会」(グラビア) (三月二一日愛読者の会の遠足。「珍しくも客員として岡落葉先生、みゆき女さんもお見えになりました」とあり、「みゆきさん」達の丸写真が誌面中央にある)

少女画報 3・6 大3・5・5増刊 みゆき女「少女スケッチ 愛ちゃんの一日」*

少女画報 3・6 大3・5・5増刊 とみ子すえ子「紅の花会の記」 我川先生のお宅で「みゆき様とお妹さんとそれからお友達」に紹介された。三月二十一日の会。

演芸画報 8・6 大3・6 濱野ゆき「素がほ」*(市川左団次と松蔭、中村翫助、中村吉右衛門)

少女画報 3・7 大3・6 みゆき「美智さま参る」*

少女画報 3・8 大3・7 みゆき「少女対話 わかれ路」

少女画報 3・9 大3・8 みゆき「行きずりに」

少女画報 3・9 大3・8 (筆者記載なし)「愛ちゃんの日記」

(大3・5・5「愛ちゃんの一日」等に近く、明るいもの)

演芸画報 8・9 大3・9 濱野ゆき「国太郎さん」*(河原崎国太郎)

少女画報 3・10 大3・9 みゆき「ある夜のこと」

演芸画報 8・10 大3・10 濱野雪「こども役者の群れ」*(昔の歌扇さまへ)

少女画報 3・11 大3・10 みゆき「秋のたより」

少女画報 3・11 大3・10 (筆者記載なし)「引越しの日」(目次では「雪子」。次号と同じく「愛ちゃん」が主人公。)

少女画報 3・12 大3・10・5増刊 みゆき「愛ちゃんの日曜」*

少女画報 3・13 大3・11 みゆき「少女対話 八ツ手の蔭にて」

少女画報 3・13 大3・11 愛ちゃん記「失策日記」

青鞥 4・11 大3・12 濱野雪「はつ秋」*(小説)

少女画報 3・14 大3・12 みゆき「冬の雨」

演芸画報 2・1 大4・1 濱野雪「狂言座の初日」**

少女画報 4・1 大4・1 みゆき「十七の春を迎へて」

少女画報 4・2 大4・2 みゆき「三ツの赤い封筒」*

少女画報 4・5 大4・5 みゆき「桜ちる頃」*——葉子の日記

青鞥 5・5 大4・5 濱野ゆき「こゝのつの頃」*(小説)

少女画報 4・6 大4・6 みゆき「夢にあふひと」

青鞥 5・7 大4・7 濱野雪「真実の心より」*(小説)

少女画報 4・7 大4・7 伊澤みゆき「半四郎のこ」

少女画報 4・8 大4・8 伊澤みゆき「花火の夜」

青鞥 5・8 大4・9 濱野雪「七月末の日記より」(日記)*

少女画報 4・9 大4・9 伊澤みゆき「はつもとゆひ」

少女画報 4・10 大4・10 伊澤みゆき「青い橋」——同号

に「少女画報主筆我川高橋昌徳君永々病気の処」秋田にて死去
という「謹告」掲載。

青鞥 5・10 大4・11 濱野雪「夜から朝へ」(小説)

*時事新報 大4・11・4「十一月の雑誌から」青鞥「濱野

雪子女史の『夜から朝へ』は、描写にむらが多い」

少女画報 4・11 大4・11 伊澤みゆき「秋の家より」

少女画報 4・12 大4・12 伊澤みゆき「散る山茶花」

少女画報 5・11 大5・1 伊澤みゆき「初春の雪」

少女画報 5・2 大5・2 伊澤みゆき「椿の島へ」

少女画報 5・3 大5・3 伊澤みゆき「春やむかしの——み

どりの追憶——」

少女画報 5・4 大5・4 伊澤みゆき「小さな物語」

少女画報 5・5 大5・5 伊澤みゆき「春も逝く」

少女画報 5・6 大5・6 伊澤みゆき「水無月日記」

趣味之友 2・7 大5・7 濱野雪「雨の夜に」

少女画報 5・7 大5・7 伊澤みゆき「梶の葉に」——同号

に吉屋信子「花物語 その一 鈴蘭」、田村俊子「私の人形」

掲載

少女画報 5・7 大5・7 ゆき子「夕涼み」

少女画報 5・8 大5・8 伊澤みゆき「また遭ふまで」

少女画報 5・8 大5・8 ゆき子「海の風」

少女画報 5・9 大5・9 伊澤みゆき「星の流る、夜」

少女画報 5・10 大5・10 伊澤みゆき「コスモスの散る夜に」

少女画報 5・11 大5・11 伊澤みゆき「その夜の謎」

少女画報 5・12 大5・12 伊澤みゆき「霧の夜」

演芸画報 5・4 大7・4 濱野ゆき「浪子と丁山と」(「不知

帰」、「通夜物語」の新派劇)

演芸画報 5・5 大7・5 濱野ゆき「観音劇場の楽屋にて」

(「英百合子、武田正憲」

*赤い鳥 1・5 大7・11「賛助読者名簿(三)(申込順)」に「伊

東英子(幹事)」

*中外 3・1 大8・1「編輯部」に、伊東六郎、伊東英

子等の名がある。

*中外 3・1 大8・1「懸賞小説」第三回選者島崎藤村

の「応募小説を読む」にある、「佳作」「傷つけるたましひ」(下

谷 水鳥すみ子)「評中の引用文から、「傷つけるたましひ」が

翌月「三田文学」掲載の「病めるこ、ろ」のもととなった英子

の作品であることがわかる。

三田文学 10・2 大8・2 伊東英「病めるこ、ろ」(小説)

*時事新報 大8・2・7朝 吉田絃二郎「雪空の下にて」(四)

「作者のお静に対する理解がドストエフスキイの作品のなか

の或る女を思はせるやうな点があつた。妹のためにつけ鬢を密と遣して行く心もいぢらしく思はれた。たゞ信一だけは他の性格をはつきりさせるために少し無理に描かれたやうな気がしな
いでもなかつた。」

赤い鳥 2・4 大8・4 伊東英子「弱虫」

演芸画報 6・6 大8・6 濱野ゆき「(花形役者月旦) 男女

蔵のこと」

*赤い鳥 3・1 大8・7 「(通信) 祝『赤い鳥』一周年」に「伊

東英子」。——三周年(大10・7)、四周年(大11・7)、五周

年(大12・7)も同様。二周年・六周年には「祝」の記事がな

く、二周年の「赤い鳥」賛助幹事名簿に伊東英子の名がある。

三田文学 10・10 大8・10 伊東英子「最初の憂鬱」(小説)

*読売新聞 大8・10 上朝 上司小剣「仲秋の創作を読む(八)」

中、「女流作家出でよ」に「伊東氏はまだ若い人らしく、箸の

こけたのも可笑しいと言つた様な感情が、柔らかく出てゐる。

何処となく少女小説の様な無邪気があるのもいい。」。

*三田文学 10・11 大8・11 一記者「寄贈せられた雑誌」

「伊東ひで子女史の『最初の憂鬱』は、書き出しが非常にうまい。

女性でなければとても書けないフレツシユな感覚描写があつて

感心した。しかし、二以下がまるで駄目だ。書かうとする

ことを本当にシツカリ把握してゐない。どつちかと言へば、こ

の新演芸 4・12 大8・11 伊東英子「ある女の手紙」

*岩野泡鳴「菓鴨日記第三」(『岩野泡鳴全集 第十四卷』臨川書

店 平8・6)に、「伊東英子来訪」(大8・4・29)、「昨日伊

東英子氏の小説原稿を改造社の横関氏へ渡した」(大8・6・8)。

「内外時論よりハガキ。同社のために伊東英子を推せんする辞

を送つた」(大8・10・11)等あり。

内外時論 8・11 大8・11 伊東英子「行手は暗し」

*読売新聞 大8・11・17朝「雑誌読んだまま」「創作で『行手

に暗し』作家伊東英子氏に、望みのある見付けものをした様な

気がする。之は泡鳴氏が氏としては極めて謙遜な「極め」を付

けた作であるが、成る程斯うした死境に陥いつた婦人の心境を、

可なり細かく、艶のある手法で描いて居る◇難を言へばこの技

巧が『枯れ』て来なければならぬ、之れでは余りに投書的な、『見

て呉れ』と、無用な色彩と『身振り』の誇張に満みて居る(十一

月の内外時論)」

演芸画報 7・3 大9・3 伊東英子「芝居に現はれたる女

弁慶上使のおわざ」

赤い鳥 4・3 大9・3 伊東英子「狐の片耳」

赤い鳥 4・6 大9・6 伊東英子「朝顔」

*中央文学 4・6 大9・6 小寺菊子「現代の若き女流作家」

(前出)

演芸画報 7・9 大9・9 濱野ゆき「(芝居見たまま、)三

人吉三巴白浪」(大正九年二月市村座)

赤い鳥 5・5 大9・11 伊東英子「喧嘩のあと」

雄弁 11・12 大9・12 伊東英子「サンドキツチの恋」

演芸画報 8・1 大10・1 濱野ゆき「当代俳優未来記」浪

子と菊江^{*}

演芸画報 8・4 大10・4 濱野ゆき「婦系図」と「花の夜^{*}」

語^{がた}——三月の市村座^一

*読売新聞 大10・8・14朝 「十日会⁽⁵⁾々員の火磯行」 「会する

者有島生馬氏を初め小寺健吉(小寺菊子の夫の画家：論者注)、

渡平民の岡氏夫妻、秀しげ、伊藤英子、三浦乙女の三夫人、仲

木貞一、生田葵^{*}など、「主人三島章道氏夫妻の歓待を受け楽

しい半日を持った」

演芸画報 8・10 大10・10 濱野ゆき「戯曲に現はれたる恋

愛葛藤^{*}恋の殉教者——芝居に現はれた——(「牡丹灯籠」のお露、

「桐一葉」の銀之丞)

赤い鳥 8・6 大11・6 伊東英子「洗礼」

処女地 3 大11・6 伊東英子「竹町より」(「おとづれ」欄)

処女地 4 大11・7 伊東英子「寂しい春」(小説)

演芸画報 9・8 大11・8 伊東英子「(戯曲物語)沼津の一

夜^{*} 近松半二の『伊賀越道中双六』より」

処女地 5 大11・8 伊東英子「迷へるもの」(隨筆)

処女地 6 大11・9 伊東英子「(秋草)大蓼」(小品)

処女地 6 大11・9 英子「研究座の『かもめ』を観た

夜」(「わたしたちの手帳」欄)

処女地 7 大11・10 英子「銀座にて」／「太陽の沈み

ゆく時——橋外男著。小説」(「わたしたちの手帳」欄)

処女地 8 大11・11 伊東英子「凍つた唇」(創作)

処女地 9 大11・12 伊東英子「窓の顔」(消息、その

他)／英子「(新刊書)梅雨ばれ——坂本石創著。小説」(「わ

たしたちの手帳」欄)

演芸画報 10・1 大12・1 伊東英子「(中所に働く俳優へ送る

書)市之丞のこと」(吾妻市之丞)

処女地 10 大12・1 伊東英子「蓄音機」(短篇)

処女地 10 大12・1 伊東英子「『処女地』よさような

ら!!」(10号の最後に置かれた)

サンデー毎日 2・1 大12・1・1 伊藤英子「ある自伝

の「一節」^{*}

少女倶楽部 1・1 大12・1 伊東英子「絵と語る少女」(童話。

初山滋画)

サンデー毎日 2・13 大12・3・20 伊東英子「黒い空」^{*}

少女倶楽部 1・5 大12・5 伊東英子「桃色の塔の王女」(お

伽嘶。初山滋画。写真入)

*東京朝日新聞 大12・10・17朝 「(学芸だより)消息 伊東英

子氏 赤坂台町六十五佐々木方に転居せしが数日中に大阪に赴

く^{*}

少女倶楽部 1・11 大12・11 伊東英子「夏のおもひで」(童話。

初山滋画)

*東京朝日新聞 大12・12・27朝 「(学芸だより) 伊東六郎氏

下谷で災禍に逢ひ兵庫県西宮森具松の下に『新世帯ならぬ新世帯を持つた』と

*読売新聞 大12・12・28朝 「へよみうり抄」伊東六郎氏夫妻
今回兵庫県西宮局森具松の下に居を移した

婦人公論 9・1・1 大13・1 濱野雪子「感激・感謝・狂喜の実感」一本の薩摩芋

*『芸芸年鑑』1924(二)松堂書店 大13・3 「文士録」に「伊

東英子 旧姓伊澤。松竹キネマ社員六郎氏夫人。明治二十三年一月生れ。多くの短編小説あり。現住、東京市赤坂区台町六五
佐々木弦雄方

隨筆 2・6 大13・7 伊東英子「現代の文芸、作家、及び、作品に対して」(回答)

*『芸芸年鑑』1925(二)松堂書店 大14・3 「文士録」に「伊

東英子 別名濱野ゆき。旧姓伊澤。松竹キネマ社員六郎氏夫人。明治二十三年一月十五日仙台市に生る。数篇の小説の作あり。

旧『処女地』同人。現在、東京市赤坂区田町七丁目番地

*時事新報 大15・1・5朝 大山泰夫「寅の文士と画家(四)」

「寅年の歌人は奇妙に女ばかりで十一年生れの与謝野晶子と、二十三年生れの茅野雅子、伊東英子の三人だ」「伊東英子の名は、近頃余り聞かぬが何うして居るか」

婦人公論 12・1・1 昭2・1「現代女流百人百題」号 濱野ゆき「勇
敢なる大阪人」

若草 3・2 昭2・2 濱野ゆき「小さな雑木林にて」(小

品と隨筆)

若草 3・4 昭2・4 濱野ゆき「早春」(コント)

若草 3・9 昭2・9 濱野ゆき「シネマ小景」(評論・隨筆)

若草 3・12 昭2・12 濱野ゆき「港のをんな」(小説)
婦人公論 13・6 昭3・6 濱野ゆき「現代美男くらべ」

(回答)

若草 4・11 昭3・11 濱野ゆき「雨・その午後」(小品)
キネマ旬報 昭9・11・1 濱野ゆき「ムーラン・ルージュ
土屋伍一氏に」(گریエ欄)

松尾信資編『孤高の芸術家藤井達吉翁』(丸善 昭40・8) 須田
英子「思い出のかずかず」(末尾に「元大映多摩川撮影所長夫人」

*『女性文学の近代』(女性文学会編 双文社出版 平6・4)に、

「処女地」掲載の「凍つた唇」採録。

*日本ペンクラブ・電子文芸館「招待席」に「凍つた唇」採録。

<http://www.japanpen.or.jp/e-bungoikan/guest/pdf/itoueiko.pdf> (平26・11・25閲覧)

二、林真珠 「山本千枝子」

明治三五(一九〇二)年四月、平成五(一九九三)年四月二日。

広島県御調郡奥村(現尾道市)生まれ。旧姓林。小学校校長
林山太郎の長女。広島市に移り、私立進徳高女卒。文学修業を志

して大正一三年に二二歳で上京し、林真珠の筆名で『週刊朝日』文

章倶楽部」等に童話や短編などを発表した。新居格『月夜の喫煙』(解放社 大15・3)に描かれたモダン・ガールのモデルの一人であった。シナリオを書いて、気鋭の映画監督であった山本嘉次郎を直接訪問したことをきっかけに、嘉次郎監督映画「父さんの売物」に出演(大15)、昭和二年嘉次郎と結婚。戦後は、東京世田谷区の砧生協設立に参加し、推されて昭和二二年から世田谷区議会議員を八年間つとめ、視聴覚教育等に尽力。昭和二七年にはビルマ(現ミャンマー)のラングーンで開かれたアジア社会党会議に、映画「原爆の子」を携え、婦人代表として出席。アジア軽視の風潮の中、文化交流のためにアジア文化の会を創立。八一歳で『カッドウヤ女房奮闘記』(昭58・12 朝日ソノラマ)出版。

林真珠が、山本嘉次郎の妻千枝子として『カッドウヤ女房奮闘記』を出したことは、前出岡本氏の投稿に指摘がある。

新小説 27・5 大11・5 林真珠「夜の対話」(新聞記者と新劇女優の対話)

処女地 5 大11・8 林真珠「たそがれ」(小品)

週刊朝日 4・9 大12・8・19 林真珠「乞食の夢」(童話)

週刊朝日 4・17 大12・10・10 林真珠「夜盗」(カットは埴原久和代など)

週刊朝日 5・11 大13・1・1 林真珠「鯉になつたなまけ者」(童話)

週刊朝日 5・2 大13・1・6 林真珠「もぐらもち」(童話)

コドモアサヒ 2・2 大13・2 林真珠「でんでんむしの

おひっこし」

週刊朝日 5・14 大13・3・30 林真珠「ふしぎな刺青」(童話) ↓刀襦館正雄編『朝日童話集』(大13・12 東京・大阪朝

日新聞社)に収録。

週刊朝日 5・21 大13・5・11 林真珠「地主と三人の乞食」

週刊朝日 5・26 大13・6・15 林真珠「蝕まれた日陰者」(創作)

週刊朝日 6・6 大13・8・3 林真珠「月に吠えるもの」(童話)

週刊朝日 6・12 大13・9・14 林真珠「笛を吹いて歩く旅

の男の話」

金の星 6・10 大13・10 林真珠「二人の泥棒」(童話)

週刊朝日 6・17 大13・10・12 林真珠「一本す、きと赤

とんぼ」(童話)

週刊朝日 7・14 大14・3・29 林真珠「青白い馬」(童話) ↓若月一步編『童話と童謡』(大15・12 日本電報通信社)

に収録

週刊朝日 8・15 大14・10・1 林真珠「女郎蜘蛛」(写真入)

コドモアサヒ 4・1 大15・1 林真珠「たぬきのお囃子」

*読売新聞 大15・4・26夕「のろけを映画に残したさに?」二
人の仲をシナリオに書き 作家林真珠さんの吾婦入り」(写真

入)「女流作家」林真珠さん「取つて二十七」「吾嬬撮影所の花形の山本嘉次郎君」と恋仲であったが、山本君の紹介で撮影所入りし、長崎武君原作の悲喜劇「父さんの売物」を主演撮影中、山本君は監督、「真珠嬢才筆を振つて『都会の横顔』となどん題したシナリオを書き上げ」「ラヴシインの連続で」「山本君と共演で映画になつたら」大変と「キネマ雀がやかましい」

*キネマ旬報 269 大15・6・1 「各社近作日本映画紹介」父さんの売物」に、解説と略筋、写真があり、主要役割のうち医学博士青山信行夫人淑子に「林真珠嬢」とある。「日本劇映画総目録——明治32年から昭和20年まで」(平20・7 日外アンシエーツ)に「父さんの売物」「大正15年 高松プロ 無声版」等とある。

解放 5・6 大15・6 林真珠「歯痛」(新居格の小説にモデルに使われたこと、もととなつた出来事を書いたもの。新居格『月夜の喫煙』(解放社 大15・3)「プロムナード」の、親しい男性の多いモダンガール村山珠樹のモデルを指す。珠樹はシネマに関わり、「童話や詩や短篇」を書き、ある程度原稿が売れているが、何程の収入にもならない程度である。) ↓「社会主義随論集I」(山崎今朝弥編 大15・11解放社)に収録
週刊朝日 10・4 大15・7・18 林真珠「しらつか・しゅん」(小説)
週刊朝日 10・5 大15・7・25 林真珠「くらげの青助」(童話)
週刊朝日 10・18 大15・10・17 林真珠「対岸の風景」

文章倶楽部 11・10 大15・10 林真珠「ひとつの挿話」

生活科学 3(通4・7) 昭21・9 山本千枝子など「食生活の新設計(座談会)」(写真入。「東宝演出家山本嘉次郎夫人、碓協同組合の幹部として活躍中」とある)

映画教室 3・11 昭24・11 山本千枝子「愛する子等のために——区会議員の立場から——」(末尾に「世田谷区議会議員・山本嘉次郎氏夫人」)

キネマ旬報 79 昭25・4 山本千枝子「映画教育の現状」
映画を教室にもちこんだ 世田ヶ谷区の報告(末尾に「社会党・世田ヶ谷区議」)

社会教育 5・7 昭25・7 山本嘉次郎(映画演出者)・山本千枝子(山本嘉次郎氏夫人・世田ヶ谷区会議員)・秋山雪雄(NHKアナウンサー)等「(座談会)映画と社会教育」

「私は結核をのり越えた」(宮本忍・島村喜久治・北練平・石垣純二共編 昭26・11 婦人画報社) 山本千枝子「幸福な病人——病床から友への手紙」

オール読物 昭27・6 山本千枝子「もし今の主人と結婚しなかつたら」(回答 未見)
婦人倶楽部 33・11 昭27・11 「(おのろけ寄せ書き)映画監督夫人山本千枝子」(回答)

主婦と生活 7・11 昭27・11 映画監督山本嘉次郎氏夫人山本千枝子、評論家大宅壮一氏夫人大宅昌子、漫画家小野佐世男氏

夫人小野寧子「(座談会)亭主の心情憐れむべし」(写真入)

婦人倶楽部 34・5 昭28・4〔結核の自宅療法大特集 忘れ得ぬ温情〕一枚のハガキ 映画監督山本嘉次郎氏夫人 山本千枝子〔写真入〕

婦人公論 39・4 昭28・4 山本千枝子「ビルマの婦人たち」ほろにが通信(朝日麦酒) 34 昭28・6 山本千枝子「ビルマの巻 ちよろちよろなれど……」(写真入。紹介に、映画監督山本嘉次郎夫人。戦前、日本シエパード犬協会の幹部として、シエパードの繁殖法については一家をなしている。戦後世田谷区会議員に当選。本年一月ビルマで開かれたアジア社会党会議には、唯一の女性代表として出席、とある)

映画評論 10・9 昭28・9 山本千枝子「インド、ビルマの映画人たち」(写真入。末尾に「現世田谷区会議員、山本嘉次郎氏夫人」)

視聴覚教育 7・9 昭28・9 山本千枝子「随想」ボンベイの二日(末尾に「東京世田谷区会議員・山本嘉次郎監督夫人」)
*週刊朝日 昭29・3・14 山本嘉次郎「妻を語る」ただ驚嘆!
(グラビア)

淡交 8・5 昭29・5 山本千枝子「主人の趣味」美味求真
婦人倶楽部 35・12 昭29・12 山本千枝子「美しい隣人愛」(写真入。末尾に「世田ヶ谷区会議員」)

視聴覚教育 9・11 昭30・11 山本千枝子「1935教育映画祭によせて」(回答)

娯楽よみうり 2・45 昭31・10 山本嘉次郎氏夫人山本千枝子・女優清川虹子・巨人軍助監督千葉茂など「食通漫談 韓国料理を召しませ」(写真入)

女性教養 214 昭31・11 「家庭と社会の清潔 アジア文化の会常務理事山本千枝子」(写真入)

食生活 50・11 昭31・11 「わが家のスキヤキ」香辛料で

エキゾチックな味を(山本嘉次郎氏夫人) 山本千枝子

*読売新聞 昭31・11・24朝「女ころ私 はこうしてつかまえた」山本嘉次郎氏(写真入)「戦後いち早く成城付近に生活協同組合を作り、異色ある区会議員としてバリバリ活躍している千枝子夫人も、その昔は芥川龍之介に師事して林真珠というペンネームで小説を書いていた文学少女だった。新居格氏の紹介で、自分の描いた小説の映画化をカジさんのもとへ持込んだことがきっかけとなり、小説は映画化されなかった代りに二人は結ばれて、半年後の八月八日」に式を挙げた。共にゴルフ等を楽しんでいる。↓読売新聞婦人部編「男(ころ女)ころをどうしてつかんだか」(北辰堂 昭32・5)に収録。

*朝日新聞 昭32・1・31朝「趣味の指南役」犬とネコ 主婦山本千枝子さん(写真入) ↓「趣味の指南役」(朝日新聞社会部編 凡凡社 昭32・10)に収録

週刊サンケイ 6・49 昭32・12・8 山本千枝子「妻の言い分」うち面の味はニガけれど(写真入。末尾に「山本嘉次郎氏 映画監督 夫人」)

*市川房枝『私の政治小論』(昭47・8 秋元書房)の「私の選挙日記」(昭34・5・13) 山本千枝子氏は映画監督の山本嘉次郎夫人で社会党から世田谷区議に出ていられたが、考えるところがあつて、このたび社会党をぬけ私のために一生懸命やつていて下さる。

婦人之友 53・10 昭34・10 市川房枝、山本千枝子など「(座談会)身辺から住みよい社会に―地方政治に婦人の力を―」(写真入)。「成城町の協同組合運動から世田谷区議会議員として八年間活躍、山本嘉次郎氏夫人」と紹介あり)

婦人之友 54・7 昭35・7 山本千枝子「(私の日記)キャット・ショウ」(写真入。末尾に「嘉次郎氏夫人」)

装苑 15・12 臨増 昭35・9・10 山本千枝子「猫の飼い方」
婦人之友 55・3 昭36・3 山本千枝子「(ある日の客間) 英会話教室のお仲間と」(グラビア)

随筆サンケイ 14・8 昭42・8・1「セミが鳴いては一本つける」(山本嘉次郎氏夫人) 山本千枝子

文藝春秋 48・2 昭45・2 「ニヤロメの審査 山本千枝子(JCA審査部長)」(JCAは、日本ネコ協会)

*朝日新聞 昭54・3・15夕「嘉次郎さんのコケシ豪州へ」(写真入) オーストラリアにできた日本民芸館に嘉次郎の集めたコケシ約二百点を寄贈したいと名乗りをあげた。

*視聴覚教育 33・7 昭54・7 R・K「山本千枝子さんの再起を祈る」

*朝日新聞 昭56・1・25朝「山本嘉次郎氏未亡人と世田谷区長 異色の二人展 黒沢監督も応援」(東京版 写真入)

週刊朝日 昭58・4・1、8、15 山本千枝子「カツドウヤの夫(故・山本嘉次郎)に泣かされた半世紀(上)(中)(下)」(各写真入)

●山本千枝子「カツドウヤ女房奮闘記」(昭58・12 朝日ソノラマ)

*朝日新聞 昭59・1・30朝「(話題のほん)カツドウヤ女房奮闘記(酒)」

*朝日新聞 昭61・3・28夕「芸術家の善意集めた美術館 山本監督の未亡人300万円寄付し、心待ち」(写真入)

*週刊新潮 平5・4・15「墓碑銘 山本嘉次郎監督未亡人『酒と女』への抵抗人生」(写真入)

*『朝日年鑑 別巻 キーバースン 1961』(平6・3 朝日新聞社)「物故者」欄に「山本千枝子 93・4・2(没:論者注)

90(歳:論者注) 東京世田谷の酪生協創設者。元世田谷区議。映画監督だった故山本嘉次郎の夫人」

*『日本映画人名事典 監督篇』(平9・11 キネマ旬報社)「山本嘉次郎」の項「26年の『父さんの売物』に出演し林真珠の筆名で童話も書いた千枝子夫人と結婚。彼女は世田谷区会議員もつとめた女傑として鳴らす」

結び

伊東英子は、「処女地」の伊東英子であり、「三田文学」「赤い鳥」の伊東英子であるだけでなく、「少女画報」の伊澤みゆき、「青鞥」

「演芸画報」、「若草」「婦人公論」の濱野ゆき(雪)であった。¹⁵⁾つまり伊東英子は、明治四五年からはほぼ五年間「少女画報」の伊澤みゆきとして活躍し、人気を得ていた女性であった。「少女画報」は、少女小説の代表といふべき吉屋信子の「花物語」を掲載した

ことで知られる雑誌である。そして吉屋信子が、強い影響を受けたと書いているのが、この伊澤みゆきの作品なのである。「処女地」より前に、英子が「青鞥」「三田文学」等に書いた作品も注目されていた。英子は「処女地」終刊後も、「サンデー毎日」「若草」等に作品を書いたが、執筆が遅れたのはだいたい昭和初期までである。『文芸年鑑』(大14)「文士録」に、「旧『処女地』同人」とあることから、英子にとって「処女地」が重要な発表誌であったこともわかる。

林真珠は、「処女地」終刊後の大正十三年に文学修業のために上京し、ほぼ毎月「週刊朝日」に童話を書いた。それらは「かつて『週刊朝日』に掲げた評判のもの」を収めた『朝日童話集』(大13・12)や、「皆さんがお馴染の作家二十三人の童話と童謡」を収めた『童話と童謡』(大15・12)に収録された。戦後は、映画監督山本嘉次郎夫人としてだけでなく、東京世田谷区碓生協創設者・世田谷区議会議員・アジア文化の会創設者等として活躍した。著書『カッドウヤ女房奮闘記』(昭58・12)には、山本嘉次郎夫人として「生活を保証された自由人」であったから活動できた、¹⁶⁾とある。確かにそのような面はあるだろうが、そればかりでなく、本人が切り拓いた仕事のあることが、目録からはわかる。「処女地」

は、創刊号の扉に作家養成機関でなく、さまざまな分野の婦人のめざめを期待することを掲げた。林真珠はこの多様性の一つの例ともいえよう。

〈無名〉ということを考えるにあたって、まず、「処女地」3号(大11・6)「おとづれ」欄に掲載された、英子のはじめての手紙「竹町より」を見てみたい。

同じ女性の方達のお作には何ともいへぬ強いくシヨツクを受けずには居られませんでした。自分もかうしちや居られぬい。——私は幾度もかうくり返しました。何か書きます。私も何かか、していただきます。ものを書くこと云ふ事が私の一生の希望ではなかつたでせうか。覚えていらして下さいませ。二本榎にお住ひの頃、ひどい夕立のあつた日におはなしをうかがいに上りました私を。あの頃の私はたゞく創作をしたいばかりに燃えて居りました。そして今でもその気はつゞいて居りますのにしかもほんのまれにしか書く事が出来ぬと云ふのは——それを思ふと自分のふがいなさがほんとに情無くなつてしまひます。でもこんどはほんとに書きます。書かすには居られない気がいたしました。どうぞこの気持をばくんで下さいませよう。

英子が「処女地」以前にすでにかなり注目されていたことを見れば、英子の書きぶりは何なのかと考えさせられる。これが「赤い鳥」に「洗札」を掲載したのと同月のものであることを見れば、「創作」は童話ではなく「小説」を指すのであろう。それにして

も、全くの素人であるかのような、このような「処女地」の言説を、現在の感覚でうのみにすることはできない。

『女性文学の近代』(前出)や日本ペンクラブの電子文芸館(前出)には、伊東英子の「凍つた唇」が収録され、高く評価されている。英子が残した作品は「処女地」の数編のみが知られていたこともあり、『女性文学の近代』「解説」において岩見照代氏は、英子の「徹底した(無名性)」に注目した。そして「歴史に名をとどめた(新しい女)」を支えた名もなき新しい女たちの一人である英子を考えることで、無数の英子たちをここから考えはじめることができるのではないだろうか」と書いた。本稿の意図も、まさしく「無数の英子たちをここから考えはじめること」にある。しかしながら、「歴史に名をとどめた(新しい女)」を支えた」という表現には違和感がある。それぞれの女性達の足跡を見れば、それぞれの女性達自身の闘いが見える。

〈無名〉とはどういうことか。才能や継続する力が、〈無名〉でない作家となるために必要であることは否めない。しかしながら、当時においてはある程度知られていた人を、それを知らうとしないうから知らない、というだけで〈無名〉としている可能性もある。山本芳明氏が『文学者はつくられる』(ひつじ書房 平12・12)で、昭和初期の円本ブームは読者層の購買力を吸収して円本以外の出版市場を狭め、新進作家達は発表舞台を失った、と指摘している。つまり、円本全集に入れられるかどうかで、所謂有名作家と、それ以外の作家とに線引きされたことになる。このような近代出版

流通システムによる線引きだけでなく、一つ一つは小さな様々な要因が、歴史に名を残す〈有名〉と〈無名〉の間には在るのかもしれない。

本稿で取り上げた二人の女性は、文学作品を書き続けたわけではない。しかしながら、持続的な活動で人生を積み上げていく重さが、目録からはわかる。〈有名〉な人ほどには存在や影響力が大きくなくとも、〈無名〉の人もまたそれぞれの人の重みを持つことが知れるのである。

〈注〉

(1) 洪川驍『宇野浩二論』(中央公論社 昭49・8)、川西政明前掲書、西橋茂樹「伊澤きみ子の死についての一報告——宇野浩二『苦の世界』のモデル」(『語文』平3・12)等。飯沢匡「我が従姉・きみ子」(『小説新潮』昭47・4)には、英子たちの母も医師、とある。

(2) 「濱野ゆき」は、『青鞥』人物事典「110人の群像」(らいてふ研究会 大修館書店 平13・5)においても「調査中」の人物である。

(3) 岸松雄『人物・日本映画史 Ⅰ』(ダヴィッド社 昭45・8)「山本嘉次郎」等に書かれている。須田鐘太が日活多摩川映画次長として編纂した『日活多摩川誌』(昭17・10)には、戦時映画統制制によって大日本映画制作会社に日活が統合合併されることが書かれ、鐘太はのちに大映取締役東京撮影所長になる(昭

22. 『大映十年史』昭26・11による)。山本嘉次郎(明35・3・15
→昭49・9・21)は、俳優や脚本家等の経験を積み、日活からP
CL(東宝スタジオの前身)に移籍し(昭9)、エノケン喜劇、「綴
方教室」(昭13)、「馬」(昭16)、「ハワイ・マレー沖海戦」(昭17)
等を監督。黒澤明、高峰秀子、三船敏郎等を育てた。本稿「林真
珠」の夫である。

なお、伊東六郎(明21・7・18生)は、「帝国文学」や「聖盃」
その後継誌「仮面」等にチエーホフやアンドレーエフの翻訳や小
説を載せ、チエーホフ『女天下』(大2・11新陽堂)等の翻訳書
を出した後、大正六年に「中外」編集委員になった(『日本近代
文学大事典』講談社 昭52・11、葩島巨『ロシア文学翻訳者列伝』
東洋書店 平24・3 等による)。六郎はこの後、国際活映株式
会社(国活)を経て、松竹本社営業部外国部長として入社就任し
た(大11・7。松竹キネマ合名社は大正九年創立。「松竹百年史」
本史 平8・11による)。ここまで岡本氏の指摘がある。六郎は
震災後しばらくは西宮に居たが、『日本映画事業総覧 昭和五年
版』(市川彰 国際映画通信社 昭5・7。「コレクシオン・モダ
ン都市文化 19 映画館」ゆまに書房 平18・5所収)「内外映
画事業興信録」の中の東京「一立商店」に「伊東六郎氏が外国映
画部支配人として専ら采配を振つてゐる」とある。立花良介が設
立した(大14・2)一立商店は、立花が阪妻プロダクションを起
こした後も存続して、前年来外国映画配給に力を入れ、佐々木枝
雄のワーナー映画社とも提携して営業成績を挙げたとある。

(4) 同号「総評言」に、「日課表は作物と対照して其人の生活
状態の一般を知らしめやうと云ふ方針で、余興的に募りました」
とある。

(5) 同号に、「処女地」に書いた若山喜志子の「少女小説 泡雪」
掲載。

(6) 「赤い鳥」第三郵便物の認可のために「赤い鳥会員」とい
う名を使わず「賛助読者」という名で御賛助を仰ぐという「謹告」
が、1・3号(大7・9)にある。1・3号の「賛助読者名簿」
には泉鏡太郎(鏡花)・有嶋生馬ら、1・4号には鳴崎春樹(藤村)、
小川健作(未明)ら、1・5号には芥川龍之介・小山内薫らの名
が「幹事」としてあがっている。2・1(大8・1)には「処女
地」に書いた細川武子の名も見える。

(7) 東京朝日新聞(大8・11・2朝)の広告「内外時論 同盟
罷上とサボタージュ研究号」に佐藤春夫「陥穽と振子」と併記さ
れているが、所在不明で未見。「雑誌読んだまま」で言及された
泡鳴の評は、『石野泡鳴全集』(臨川書店 平6・10→9・7)に
は無いが、泡鳴の推薦によつて掲載されたことが泡鳴の日記から
わかる。英子は「中外」編輯部で泡鳴と知り合ったと推測される。
(8) 十日会は、「文芸家の集まり 十日会」(岡落葉談「読売新
聞」大7・10・6朝)等によれば、大正二年一〇月、岩野泡鳴、
正宗得三郎、岡落葉ら西大久保に住んでいた人々が中心となつて
始まり、小寺菊子夫妻、有島生馬、山田邦子、「処女地」の画家・
埴原久和代、加藤朝鳥らを出席者として、男女混交で春秋の遠足

もした、月一回の小説家・画家等の集まりである。英子は、岩野泡鳴（大9・5没）の家を訪れ、岡落葉と「少女画報」の紅の花会の遠足で同席したこともある。小寺菊子が、かつての伊澤みゆきが「三田文学」に書いたことを知ったのも、この会の席上かもしれない。

(9) 「処女地」同人の三木栄子「夕飯」と併載。目次に「文壇名家の創作二十四篇」とある。二ヶ月後の「サンデー毎日」（大12・3・20）の作品も、三木栄子「彷彿」と併載。「処女地」終刊後の同人について、藤村が幹旋したものと考えられる。

(10) 転居は関東大震災によるものであろう。佐々木弦雄は、日本に正式な支社のなかったワーナー・ブラザーズ社の作品を輸入し、配給していた人物である。

(11) 『戦前期』『週刊朝日』総目次』では、「林麟」執筆とある。「林麟」は、同誌に昭和一〇年頃から科学等に関わる記事を執筆した医学博士（昭19・4・30の記載）。また、8・15の「女郎蜘蛛」は「女学生達」になっている。

(12) 突然大咯血に襲われ（昭17・6）、自宅療養1年、再発し（昭22・8）、入院して二回の成形手術を受け（昭22・10、昭23・4）、半年で生協と区会の仕事に再従事した、とある。

(13) 英子は、伊澤英子として投書をはじめた。伊東英子と林真珠に別名のある理由のひとつは、結婚によって、伊澤から伊東、林から山本と、姓が変わったことである。同一人物であることがわかりにくく、これは、今日の夫婦別姓問題に関わる。

(14) 「一流の女流作家となるには」（「少女の友」昭24・4）、「「想い出の少女時代」女医になりたかった私」（「少女の友」昭26・10）。久米依子『少女小説』の生成（青弓社 平25・6）に指摘がある。同書に、伊澤みゆき「捨犬」「美智さま参る」等への言及もある。

(15) 敗戦で、「それまでの日本女性は、耐え忍ぶことだけが美德とされてきたのに、突然、男女同権という広い視野を必要とする世界が目の前に開け」「生きる張り合いと希望を与えてくれた」、極度の食糧不足の時代だったので生活協同組合の実現に踏み出した、とある。また、姑が嘉次郎の世話を一手に担い、階段に座って嫁が息子に会いに行くのも拒むような家であったから、社会運動に参加した面もあり、嘉次郎の女性関係に対する苦しみは、結婚の大手術以上のものであった、ともある。

(16) 藤村が二本榎に住んだのは、渡仏の直前と帰国後の大正五年七月から翌年五月までである。藤村は「読者へ」（「処女地」大11・11）に「伊東英子、三宅せい子の二人は発行者の旧知」と書いている。

「付記」本稿は日本学術振興会科学研究費（基盤研究C）による研究成果の一部である。